

# 平安・鎌倉時代における「動詞十テ十キル(居)」の意味について

岡野幸夫

## 目次

- 一、はじめに
- 二、先学の研究
- 三、平安時代における「動詞十テ十キル」の意味
- 四、院政・鎌倉時代における「動詞十テ十キル」の意味
- 五、「動詞十テ十キル」が「動詞十キル」の意味領域に進出した背景
- 六、おわりに

## 一、はじめに

本稿は、平安・鎌倉時代の文献にみられる進行態・既然態表現の一形式である複合動詞「動詞十キル」と、それと形態が類似する「動詞十テ十キル」とを対象とする。そして、この両形式が表す意味の張り合い関係を明らかにするとともに、「動詞十テ十キル」が「動詞十キル」の意味領域に進出する過程と、その要因を明らかにするものである。

複合動詞「動詞十キル」は、前項動詞が表す動作の性質の相違によって、進行態と既然態の両方を表し、「〜シテイル」と現代語訳される。<sup>(1)</sup>一方、「動詞十キル」と類似した「動詞十テ十キル」という形式が散見する。注釈書の類では、この

平安・鎌倉時代における「動詞十テ十キル(居)」の意味について

ような場合、類似した形態に同じ意味を与えて済ませていることが多い。しかし、わずかではあっても形態に相違がみられる以上、意味にも相違がないかどうか、十分な検討をほどこす必要がある。

この両形式の意味的關係は、本稿で述べるように、進行態・既然態表現形式の史的変遷という問題につながるものである。また、接続助詞「テ」の有無によって、その形式の意味にどのような変化がみられるかという、複合動詞の意味の研究上、大変興味深い問題にもつながってゆくものであるが、この点については別の機会に改めて述べたいと思う。

以上の問題意識のもと、以下の方法で検討を行った。

まず、平安時代と院政・鎌倉時代という二つの共時態を設定する。次に、それぞれにおける両形式の意味を比較検討し、意味が混同しているものについて、その要因を求める。最後に、両共時態の様相を総合する。

用例の意味を判定するにあたっては、文脈から読みとることを基本としたが、恣意的になるのを防ぐため、以下の諸点に着目しつつ作業を行った。

- ・意味、構文上の必然性
- ・構成要素に接する敬語、接辞の存在
- ・前後に用いられる語句
- ・登場人物の眼前の光景として描かれているか否か

第四点について一言すると、これは、「動詞十テ十キル」の表す動作が、他の登場人物の目に映る具体的な動作になる場合、後部要素の「キル」は本動詞としての意味を保っているものとみなす、ということである。

検索した文献は、稿末に使用テキストとともに一覧した。<sup>(2)</sup>

## 二、先学の研究

古典語の「動詞十キル」と「動詞十テ十キル」とにふれた研究としては、次のものがみられる。

① 柳田征司「進行態・已然態表現の変遷——「アル」「イル」「オル」——」〔室町時代語基本語詞の研究〕 武蔵野書院・平成三年七月

② 高橋敬一「『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「くキル」「くテキル」について」〔活水論文集〕 三六・平成五年三月

③ 高橋敬一「今昔物語集における「く居ル」「くテ居ル」について」〔活水論文集〕 三七・平成六年三月

①の柳田氏の研究は、上代から現代までを視野に収め、進行態・已然態表現の変遷を素描したものである。その中で柳田氏は、平安時代の「動詞十キル」は進行態を表し「動詞十テ十キル」は進行態と已然態の両方を表すとした。また、室町時代中期に「動詞十キル」が衰退している理由として、同一母音の連続が避けられた・後部要素「キル」の補助動詞としての存在力が弱かった、という二点をあげる。筆者は、平安時代の「動詞十キル」が進行態をしか表さない、という点に疑問を感じる。また「動詞十テ十キル」の意味も再検討する余地があると考えている。②③の高橋氏の研究は、参考とすべき点が多いものの、柳田氏の研究を出発点としているため、右と同様の問題を持つといえる。

本稿は、平安時代の「動詞十テ十キル」の意味を再検討し、柳田氏が検討しなかった院政・鎌倉時代についても検討を加えるものである。そうすることによって、「動詞十キル」が、室町時代中期にはすでに「動詞十テ十キル」といつてかわられていた、という大きな流れの中に、平安・鎌倉時代の「動詞十テ十キル」がどう位置づけられるのか、が明らかになると思うのである。

## 三、平安時代における「動詞十テ十ヤル」の意味

稿末の〈別表一〉を参照されたい。この表は、平安時代の「動詞十テ十ヤル」の前部要素となる動詞の一覧である。〈別表一〉の (a) は、後部要素の「ヤル」が本動詞としての意味を保っているもので、〈別表一〉の (b) は「ヤル」が本動詞としての意味を失い、全体として進行態・已然態表現になっているものである。この他、(a) にも (b) にも解することのできる、両義的なものが多く認められたが、現段階では表す意味が特定できないため、本稿の検討対象からは除外する。<sup>(3)</sup> 表の上段に前部要素となる動詞を掲げ、下段に用例が認められた文献(略称)と用例数とを掲げた。その他、表の見方は〈別表一〉を参照のこと。以下、(a) から順に検討を加えてゆく。

(1) (a) に属するもの

検討が冗長になるのを避けるため、すべての例について説明することはしない。本稿では、用例が比較的多くみられ、かつ「ヤル」が本動詞としての意味を保っている例が多くを占めている「おしかかりてゐる(押懸)」と「おもひてゐる(思)」とを代表として取り上げ、検討することとする。

「おしかかりてゐる(押懸)」

まず、用例を示す。

① かうらんのもとに、これかれをしかかりてゐたるところに、(宇津保・くらびらきの下・一一五七⑥)

② 人氣のすれば衣の中より見るに、うちゑみて長押におしかかりてゐぬ。(枕・三四段・七月ばかりいみじう暑ければ・五〇⑥)

③ おほかたのけはひわつらはしけれとみすはかりはひききてなけしにおしかかりてゐ給へり(源氏・さか木・三三六⑧)

校異……河内本系統ノ五本ハ全テ「をしかかり給へり」トスル

④あさみどりなるこずゑの、何となくけぶり渡りたるほどをながめて、端近う柱に寄り居てをこなひ給に、思もかけず、艶なるねくれたれの姿、なまめかしうて、御簾うちあげて、簀子の長押にをしかりて居給ひぬれば、なをいとつゝましうて、(浜松・巻の三・二九五⑦)

⑤御几帳おしやりて、「などかくのみうもれては。さかりなる花のにはひも御覽ぜよかし。御達などもあまりいぶせく、ものすさまじげに思ひてはべるはや」とて、床におしかかりてゐたまへば、御ぐしはたけに七八寸ばかりあまりたれば、花薄の穂に出でたる秋のけしきおほえて、(とり・上・八⑧)

用例①から⑤に「高欄のもと・長押・床」等とあるところから明らかなように、「おしかかりてゐる」は、その動作の及ぶ場所が具体的・限定的である。従つて「ヨリカカツテ、スフル」という意味に解するのが適當であろう。

「おもひてゐる(思居)」

「おもひてゐる」の場合、接続助詞「テ」を介さない「おもひゐる」の用例がみられるので、それと比較しながら検討する。まず、「おもひゐる」の用例から示す。

・つかふ人など「……、自らこそ暇も障り給(ふ)ことありとも、御文をだにたてまつりたまはぬ、心うきこと」などこれかれいふ。心ちにもおもひゐたることを、人もいひければ、心うく悔しとおもひて泣きけり。(大和・一〇三③段・二八二④)

・中務の宮わたりの御ことを御心に入て、そなたの心よせある人とおぼして、かたらはせたまふも、まことに心のうちには、思ひゐたる事おほかり。(紫・寛弘五年十月十余日・二七二⑬)

・ものもの給はていとうくくちおしとおほすになみたほろく、とこほれ給ぬみたてまつるもいととおしうなに、ありのまゝにきこえつらむくるしき御心ちをいと、おほしみたるらむとくやしうおもひゐたり(源氏・夕きり・一三二六⑥)

大和物語や紫式部日記の例では「心ち・心のうち」とあるところから、「おもひゐる」が心理的な動作であることがわかる。また、源氏物語の例のように、

（心話文）十と・など十「おもひる」たり・たまへり

の形で、動作主の心理が述べられる例が多くみられる。すなわち、「おもひゐる」が表すのは動作主の心理的な動作で、意味としては「オモツテイル」のように進行態を表す。これに対し、「おもひてゐる」ではどうか。用例を示す。

⑥ 心やすき所にて月ころのおもひあまることもきこえさせんとてなむといはせ給へりいかにきこゆべきことにかと君はくるしげに思てゐ給へればめのとみくるしかりて（中略）といふ（源氏・あつまや・一八四四<sup>⑭</sup>）

⑦ かきくらしはれせぬみねのあまくもにうきてよをふる身をもなさはやましりなはときこえたるをみやはよとおほしやるにもものおもひてゐたらんさまのおもかけにみえたまふ（源氏・うき舟・一八九九<sup>⑦</sup>）

⑧ もの憂ければしばしやすらひて、ありさまにしたがひてまいらんと思ひてゐたるに、小兵衛・小兵部なども炭櫃にゐて、「いとせばければ、はかぐしう物も見え侍らず」など云うほどに、（紫・寛弘五年十一月二十一日・二九一<sup>⑧</sup>）

用例⑥は「くるしげに」や「みぐるしがりて」とあるところから、動作主の心理が表に現れていて、それを他の登場人物がみていることが知られる。つまり、この「おもひてゐる」は、乳母の目に映った浮舟の姿を描写したものと考えられ「オモツテ、スワル」という意味を表す。用例⑦は「さまのおもかけにみえたまふ」とあるところから、用例⑥と同様に、登場人物の目に映った動作主の姿を描写したもので「オモツテ、スワル」という意味を表す。用例⑧は、日記の例で、動作主は同時に表現主体でもある。この例では「小兵衛・小兵部なども炭櫃にゐて」とあるところから「おもひてゐる」も「オモツテ、スワル」という意味を表していると考えられる。

以上、（a）に属する「動詞十テ十キル」の意味を「おもひてゐる」と「おしかかりてゐる」とを代表にして検討した。他の（a）に属するものについても同様に検討した結果、表の中で（ホ）としたものについては「くシテ、スワル」「くシ

テ、(ソコニ)イル」という意味を表すことが明らかになった。すなわち、(a)に属する「動詞十テ十キル」は、前部要素となる動詞が表す動作と「キル」が表す動作(スウル・イル)とが、継起的又は並列的に行われることを表すのである。これは「動詞十キル」との使い分けがみられるという事実や、(b)に属するものが(a)に属するものと比較して極端に少ないという事実からみて「動詞十テ十キル」の基本義であると認められる。

(2) (b)に属するもの

ここでは、別表で(ア)としたものを中心に検討を加える。まず、用例を示す。

「いだく(抱)」

⑨女、塗籠の内に、かぐや姫を抱かへてをり。翁、塗籠の戸をさして、戸口にをり。(中略)立て籠めたるころの戸、すなはち、たゞ開きに開きぬ。格子ども、人はなくして開きぬ。女抱きてゐたるかぐや姫、外に出(で)ぬ。えむまじければ、たゞさし仰ぎて泣きをり。(竹取・かぐや姫の昇天・六四⑥)

校異……古本「をんなのいたきたるかぐやひめ」

「うちあかむ(赤・四)」

⑩主上外に出でさせ給てぞ、宰相の君はこなたにかへりて、「いと顕証に、はしたなき心ちしつる」と、げに面うち赤みてゐたまへる顔、こまかにをかしげなり。(紫・寛弘五年十月十六日・二七七⑩)

「おぼす(思)」

⑪北方「としごろは、いとあはれに物おぼしていたまふとうけたまはりつる。わがことやと思ひしられて、いかでとぶらひきこえんとおもひつれど、それにつけても、おもほすことやあらん、とてなん。」(宇津保・国ゆづり中・一四五⑪)

・御堂にてはさりともおぼしめしつるに、おこたらせ給はずなりぬるを、とのゝ御前も心憂き事におぼしめたり。

(栄花・巻第二十九・たまのかざり・下三〇六<sup>⑮</sup>)

「おもひほる(思惚)」

⑫きさいの宮きこしめしつけて中納言もかくをろかならず思ほれてゐたなるはけにをしなへておもひかたうこそはたれもおほさるらめと心くるしかり給て(源氏・あけまき・一六七〇<sup>⑬</sup>)

校異……別本系統四本中一本(陽明本)ハ「思ほれてすくすなるは」トスル

・弁はあなたにまいりてあさましかりける御心つよさをきゝあらはしていとあまりふかく人にくかりける事といとほしく思ほれるたり(源氏・あけまき・一六一〇<sup>⑭</sup>)

「す(為)」

⑬助と物語しのびやかにして、笏に扇のうちあたる音ばかり時々してゐたり。(蜻蛉・下・天延二年四月・二二四<sup>⑦</sup>)

⑭むかしもてつかひ給してうど、いさゝかにてならし(てならひカ)給しほうごなど、とりちらし給ものなくし給などしてゐたまひしまゝに、こと御てうどのきよう(らカ)なる、あまたそはりたれど、なきものなくしつらひをかれたり。(宇津保・国ゆづりの中・一四四四<sup>⑩</sup>)

・二位の新発は、たゞ夜の昼御祈どもを死ぬばかりしゐたり。(栄花・巻第五・浦くの別・上二七八<sup>①</sup>)

「たたふ(湛)」

⑮かくてなきくらし、なげきあかす月日、はかなくすぎゆく。いできそふものはなくて、いさゝかなりし、身のでうどなどありしは、をうな、うしなひつかひつゝ、月日ふるまゝに、たゞなみだのうみをたゝへてゐたり。(宇津保・としかげ・六〇<sup>④</sup>)

用例⑨は、当該箇所を「嫗ガ抱イテ座ツテイタカグヤ姫」と解せうとすると、意味が通らない。従つて、この例は「抱イテイル」のように既然態として解するほかない。用例⑩も同様の理由で「赤クナツテイル」と既然態として解する。

用例⑬は、動作主が非生物の「音」であるから、「シテイル」のように進行態として解さなければ意味が通らない。これらの例では、後部要素「キル」を本動詞として解そうとすると、不自然な連体関係になってしまったり、主語と述語とが意味的に呼応しなくなる、といった解釈上の不都合を生じてしまう。

用例⑭は、「としごろ」とあるところから「おぼしてゐる」動作が長期にわたるものであることがわかる。「オ思イニナッテイル」という意味で、進行態を表している。用例⑮には、それとわかる語句はみられないが、前後の文脈から、薫が大君の死後ずっと「おもひほれてゐる」たことがわかり、「ボンヤリシテイル」という意味で、進行態として解する。用例⑯は「ままに」とあるところから、「シテイル」のように進行態で解すべき箇所である。用例⑰は「月日ふるままに」とあるところから、「湛エテイル」のように既然態として解する例である。これらの例では、時間の経過を表すことが、文脈やともに現れる語句から読みとれるので、「ズット」くシテイル」のように進行態ないし既然態として解するのが適当であろう。

これら(b)に属する「動詞十テキル」の意味は、接続助詞「テ」を介さない「動詞十キル」の意味(用例が認められたものについて「・」で示した)と区別がみられない。それでは、なぜ、これらの動詞が前部要素となる場合に、進行態・既然態を表すようになるのであろうか。これら前部要素となる動詞が表す動作の性質からみると、「いだく」を除けばいずれも具体的な動きに欠ける動詞ばかりであることに気付く。用例⑱の「おぼす」や用例⑲の「おもひほる」は、いずれも心理的動作を表す動詞であるし、用例⑳の「す」は補助動詞としての用法で、動作の具体性は乏しい。用例㉑の「たふ」は状態性の強い動詞である。とくに用例⑳の「うちあかむ」の主体は「顔」で、その色の変化を表す動詞である。また、用例㉒の「す」の主体は「首」であり「す」の動作は具体的な動きに欠けている。このように、非生物が「動詞十テキル」の主語に立った場合には、後部要素「キル」の意味が本動詞としての意味では解釈しにくくなる。ここに「動詞十テキル」が進行態・既然態を表す表現形式となる契機の一つが存する。すなわち、具体的な動きに欠ける動詞が

前部要素となった場合、また、非生物が主語になった場合、後部要素「キル」の意味が「くシテ、スワル」や「くシテ、ソコニイル」という本動詞としての意味から、進行態・既然態という補助動詞としての意味へと変化するのだと考えられる。

右の検討で明らかになったことが、院政・鎌倉時代ではどうなっているかを、以下検討することとする。

#### 四、院政・鎌倉時代における「動詞十テ十キル」の意味

稿末の〈別表二〉を参照されたい。この表は、院政・鎌倉時代の「動詞十テ十キル」の前部要素となる動詞の一覧である。表の見方は〈別表一〉と同じである。

(1) (a) に属するもの

(a) に属するものは、(b) と比較して圧倒的多数を占めている。その内、院政・鎌倉時代から用例のみえるもの(〈別表二〉で「へ」のないもの)が全体の三分の二以上を占め、この時代にはまだ「動詞十テ十キル」は造語力を発揮していたことが知られる。平安時代と同様、(a)の意味は基本義としての地位を保つていえるといえよう。紙幅の都合上、個々の用例について検討することはできないので、挙例は割愛するが、ここに属する「動詞十テ十キル」は、いずれも平安時代における意味を受け継ぐものである。

(2) (b) に属するもの

(b) に属するものは、(a) に属するものと同様、院政・鎌倉時代から用例のみえるものが多くを占めている。この点、平安時代からみられる例が少ないという難点はあるが、新たな用例が出現する点を重視して、「動詞十テ十キル」の意味の変化が一般化する兆しがみえていると考えたい。以下、平安時代から用例のみえる例と、院政・鎌倉時代から用例のみえる例とにわけて検討する。

平安時代から用例がみえるのは、「す(為)」「みる(見)」の二語である。まず、用例を掲げる。

「す(為)」

①別当、心をまどはして、仏の事も、仏師をもしらで、里村に手をわかちて、尋もとむるあひだ、七八日をへぬ。

仏師ども、檀那をうしなひて、空をあふぎて、手をいたづらにしてゐたり。(宇治・四五・六九⑩)

・いかゞはせむとて、たゞ「あ」と言請けをしゐたり。(古本・卷下六七・二五一⑤)

・「人をばしらず、季重にをいてはひとひきもひくまじる物を、ひくまじる物を」とひとり言をぞし居たりける。(平家・

卷十・一二之懸・下二〇〇⑦)

「みる(見)」

②此ノ二ノ龍、互ニ噉合テ戦フ。獵師、奇異也ト見テ居タル間ニ、一時許リ戦テ、青龍負テ逃ヌ。(今昔・卷十第三十八語・第

二冊三七⑩)

・家女、一間許ヲ去テ見居バ、此ノ尼、音ヲ高クシ前々ノ如ク念仏ヲ唱ヘテ居タル程ニ、夜ニ入テ、子・丑ノ時許ニ成ヌラム思フ程

ニ、後ノ島ノ中ニ世ニ不知ス微妙キ光リ俄ニ出来レバ、家女、此レヲ見テ、驚キ恠テ、「此ハ何ナル事ゾ」ト思テ見居バ、(今昔・

卷十五第四十一語・第三冊四〇一⑥⑧)

※心からなとかかううき世をみあつかふらむかく心くるしきものをもみてゐたらてとおほしつゝ、れいのもろともにはひ

いなあそひし給(源氏・すゑつむ花・二二九⑫)

※おり給へる花をあふきにうちをきてみいたまへるにやうくあかみもて行もなかく色のあはひおかしくみゆれば

(源氏・やとり木・一七一六③)

※宮のいまめかしくこのみたち給へる程にておほしをこたりけるもけに心くるしくおしはかるれはいとあはれにて

おかしやかなる事もなき御ふみをうちをかすひき返しくみる給へり(源氏・やとり木・一七三五⑨)

平安・鎌倉時代における「動詞十テ十キル(居)」の意味について

用例①「してゐる」は「七八日をへぬ」とあり、時間の経過が読みとれる箇所だ。「シテイル」のように進行態で解する。直後に「・」で用例を示したように、用例①の「してゐる」と院政・鎌倉時代の「しゐる」との間には、意味の相違は見出しにくい。ちなみに、平安時代の「してゐる」は、後部要素「キル」が本動詞の例と、補助動詞の例とが二例ずつ認められる（別表一）の（a）。したがって、院政・鎌倉時代の「してゐる」の意味は、平安時代よりも、より進行態・已然態としての意味に近づいているといえる。

用例②「みてゐる」も「見テ居タル間ニ、一時許リ戦テ」とあることから「見テイル」のように進行態で解すべき例である。この例も用例①と同様、院政・鎌倉時代の「みゐる」「・」で用例を示したとの間に意味の相違を認めることは困難である。「みる」については、平安時代に「みゐる」「みてゐる」両形がみられる（※）で示した例。「みゐる」が、「やうやうあかみもてゆく・ひき返しひき返し」とあるところから「見テイル」のように進行態で解されるのに対し、「みてゐる」は、「世話ラシテ、（ココニイル）のようにも解されるし、「世話ラシテイル」のようにも解される、というように、両義的である。したがって、「してゐる」と同様、院政・鎌倉時代の「みてゐる」の意味は、平安時代よりも、より進行態・已然態としての意味に近づいているといえる。

次に、平安時代の文献には用例がみえず、院政・鎌倉時代になってから用例がみえるものは、次の六語である。「うむ（統）」「おきたつ（起立）」「おもひなげく（思歎）」「ていきふす（啼泣）」「もつ（持）」「やすむ（息）。これもまず、用例を掲げる。

「うむ（統）」

③家ニ行キ着テ這入テ見レバ、白髪ナル嫗一人芋ヲ統テ居タリ。（中略）ト云テ、何モト不思テラ猶、芋ヲ統ミ居タリ。（今昔・巻四第三十五語・第一冊三二五①）

「おきたつ（起立・四）」

④睨がたにきけば、庭に筵しくをとのするを、へなにわざするにかあらんときくに、こやたうばんよりはじめて、おき立てるたるほどに、薮あげたるに、みればながむしろをぞ、四五枚敷たる。(宇治・一八・二七⑭)

「おもひなげく(思歎)」

⑤其ニ物食<sup>キスベ</sup>方モ无ク、馬共ニ草可飼<sup>キ</sup>様モ无<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>バ<sup>レ</sup>ケ<sup>レ</sup>思<sup>ヒ</sup>歎<sup>テ</sup>居<sup>タル</sup>程ニ、(今昔・卷十六第七語・第三册四三五⑩)

「ていきふす(啼泣)」

⑥然レバ翁、祇園精舎ノ門ニ出テ啼泣シテ居<sup>タリ</sup>。其ノ時ニ、仏、此ヲ見給テ門ニ出給テ翁ニ問テ宣ハク、「何ノ故有カ汝爰ニ哭居<sup>ソル</sup>」(今昔・卷一第二十七語・第一册一〇六⑫)

「もつ(持)」

⑦その郡のひとかなはぬなし。となりの郡の人も、聞<sup>ク</sup>つ<sup>ク</sup>、物乞ふに従ひつ取らす。又持<sup>テ</sup>いる馬、牛おほかり。

(古本・卷下六十二・二二七⑧)

「やすむ(息)」

⑧然テ鐘槌ノ法師ニ会テ、「……。其ノ程ハ和院ハ息<sup>ミテ</sup>居<sup>タレ</sup>云ヘバ、鐘槌ノ法師、「糸吉<sup>キ</sup>事ナナリ」ト云テ、去ヌ。(今昔・卷二十九第十七語・第五册一六七②)

用例③と用例⑥は、近接した箇所それぞれ「続<sup>ミ</sup>居<sup>タリ</sup>」「哭<sup>ク</sup>居<sup>タル</sup>」という「動詞十キル」の形式が現れており、しかも面形式に意味の相違が認められないことから、進行態として解すべきである。用例④⑦⑧は、いずれも「キル」を本動詞として解そうとすると意味が通らなくなることから、それぞれ既然態・既然態・進行態として解する例である。用例⑤は「程ニ」とあるところから、時間の経過を読みとることができ、進行態として解する。

これら(b)に属する「動詞十テ十キル」の前部要素となる動詞は、平安時代と同様、具体的な動きに欠ける動詞が多くを占めているが、その中で「うむ・おきたつ」は比較的具体的な動作を表す動詞である。平安時代には「いづく」

のみであつたものに、新たに二語加わつてゐる。この点と、院政・鎌倉時代から用例のみえるものが多くを占めてゐる、ということとを考え合わせると、わずかながら「動詞十テ十キル」の意味の変化が一般化してゐることが認められるかと思ふ。

### 五、「動詞十テ十キル」が「動詞十キル」の意味領域に進出した背景

以上、本来異なる意味で使い分けられていた「動詞十キル」と「動詞十テ十キル」の両形式の意味が混同してゆく過程とその要因を明らかにしてきた。ここで、意味の混同の要因として働いたか否かははっきりしないものの、背景として存在したであろう現象を指摘する。

「動詞十キル」の内のあるものは、平安時代から院政・鎌倉時代にかけて、その意味を拡大してゐる。例えば次のような例である。

「おきゐる（起居）」

・ めのとはうちもふされずものもおほえずおきゐたり（源氏・わかむらさき・一九一⑬）

・ きのふれいならずおきゐ給へりしなごりにやいとくるしうしてふし給へり（源氏・みのり・一三八四⑬）

① 只今は起きてゐぞとは言ふめれど衣かたしき誰もねななん（弁内侍・一八一⑩）

「いでゐる（起居）」

・ その十三日の夜、月いみじく隈なくあかきに、皆人も寝たる夜中ばかりに、縁に出でゐて、姉なる人、空をつくづくと眺めて、（更級・二三④）

・ 口つき愛敬づきて、少しにほひたる氣つきたり。清げなりけり。ただ眉の程にぞおよづけのあしげさも少し出で居たりと見る。（落窪・卷一・七九⑩）

②さりげなく、「外にいで給てを」とのたまふに、いとをかしけれど、「いかゞは」とて、御簾の外にいでてゐ給へる程にぞ、わたり給へる。(寝覚・卷五・三五〇①)

③うちなりつる人々二人ばかり、縁に出でてゐぬめり。(とり・下二三⑩)  
「まぢるる(待居)」

・十日ばかりありてまかだれば、父母、炭櫃に火などおこして待ちゐたりけり。(更級・四三③)

・我は何の心にかさまては思ひたまはん待ゐたりとも人いつはるとこそわひしからめと申せは(讃岐・七五行)

・たのめ給ひし、もしまことならむ時とおもふより、いとど心はさわぎて、かの楼のもとにまぢゐたり。(松浦・一・四〇⑥)

④日頃降る雪、冴えとほりたるに、石灰の間に還立つくづくと待ちて居たりし、冷えざまもいと堪えがたし。(弁内侍・一六三⑨)

「おぎるる」は平安時代には既然態を表す例(源氏・御法の例)と「オキテ、スワル」という意味を表す例(若紫の例)とが存在し、他の「動詞十キル」よりも広い意味を持つてゐる。そこに、鎌倉前期に両義的な例(用例①)が現れる。また「いでゐる」は本来「出テ、スワル」という意味を表す(更級の例)が、平安中期頃に既然態を表す例(落窪の例)が現れる。これは「およすげのあしげさ」という非生物が主体になったためである。つまり「いでゐる」はこのような主体を取り得るようになったということである。これに伴い、平安後期頃から、二つの動作を表す「いでてゐる」が現れる(用例②③)。また「まぢるる」は本来進行態を表す(更級・讃岐の例)が、院政期頃から「待ツテ、スワル」という意味を表す例(松浦の例)が現れる。これに伴い、鎌倉前期に「待ツテ、スワル」という意味を表す「まぢてゐる」の例(用例④)が現れる。

これらの現象は、多分に個別的ではあるが、意味の外延を広げた「動詞十キル」の意味の一部を肩代わりする形で「動

詞十テ+キル」が出現している点では共通する。この現象がどの程度影響力を持っていたかについては、さらに検討の余地があるが、「動詞十キル」と「動詞十テ+キル」の意味が混同する背景に、このような事実が関与していた蓋然性は高いであろう。

## 六、おわりに

最後に、本稿で述べた事柄をまとめて示す。

- ・ 平安時代の「動詞十テ+キル」は、前部要素の動詞が表す動作と、後部要素「キル」が表す動作とが、継起的又は並列的に行われることが基本義であった。
- ・ 意味の変化は、「動詞十キル」の意味の拡大を背景に、また、直接の要因としては、具体的な動きに欠ける動詞が前部要素となったり、非生物が主語にたつようになったことにより起きた。

院政・鎌倉時代には意味の変化は一般化の兆しをみせる。

今後の課題としては、

- ・ 助動詞「タリ」「タマヘリ」との関係
- ・ 文体や位相の関わり

といったことを考えている。

																			〈別表一〉 (a)	前部要素の動詞	用例が認められた文献と用例数(1例は略す)
18	うちそばむく(側向・四)	堤(ホ)																			
17	うちそばむ(側・四)	宇津保(リ)浜松(ホ)栄花(ホ)																			
16	うちしく(敷)	宇津保(ホ)																			
15	うちかづく(被・四)	宇津保(ホ)																			
14	うちかく(懸)	堤(ホ)栄花(ツツ)(ホ)																			
13	うちおろす(下)	和泉(ホ)																			
12	うちあかむ(赤・下二)	源氏(ホ)																			
11	いる(入・四)	宇津保2(ホ)(ホ)落窪(リ)																			
10	いらふ(答)	堤(ホ)																			
9	いふ(言)	大和(ホ)宇津保(リ)落窪(リ)源氏(ホ)寢覚(ツツ)(ホ)栄花(リ)																			
8	いひわづらふ(言煩)	落窪(ホ)																			
7	いづ(出)	寢覚(リ)とり(ホ)																			
6	いだく(抱)	竹取(ア)宇津保(リ)源氏3(ホ)(リ)(ホ)																			
5	あり(有)	源氏(ホ)																			
4	あたる(当)	紫(ホ)																			
3	あぐ(上)	紫(ホ)浜松(ホ)																			
2	あかむ(赤・四)	枕(ホ)源氏(ホ)栄花(リ)																			
1	あかむ(赤・下二)	落窪(ホ)栄花(リ)																			









			〈別表二〉
18	おもひねんず(思念)	今昔(ホ)	(a) 前部要素の動詞 用例が認められた文献と用例数(1例は略す)
17	おぼゆ(思)	今昔(ホ)とはず2(リ)(リ)	
16	おほひかづく(言被・四)	今昔(ホ)	
15	おしもむ(押難)	今昔(ホ)	
14	おしめぐらす(押廻)	今昔(ホ)	
13	おしとる(押取)	今昔(ホ)古本(ホ)宇治(ホ)	
12	おしかかる(押懸)	今昔(ホ)	
11	うちやすむ(休・四)	とはず(ホ)	
10	うちふる(振)	今昔(ホ)	
9	うちかく(懸・下二)	宇治(ホ)	
8	うちうちぶす(伏・四)	讃岐(ホ)	
7	うちあはす(合)	今昔2(ホ)(リ)	
6	いる(入・四)	今昔(ホ)宇治(ギモン)(リ)	
5	いららかす	今昔(ホ)	
4	いふ(言)	今昔(ホ)宇治2(ホ)(ホ)	
3	いだく(抱)	今昔2(ホ)(ホ)宇治(ホ)たま(ホ)	
2	あつまる(集)	宇治(ホ)	
1	あく(開・四)	宇治(ホ)	

へ	37	(ここちども)す(心地共)	今昔(ホ)
	36	(くちおほひ)す(口覆)	宇治(ホ)
	35	(うやゑほし)す(恭烏帽子)	十訓(ホ)
中へ	34	す(為)	今昔2(リ)(リ)宇治3(テ)(リ)(ホ)
	33	しほれかへる(妻返)	平家(ホ)
	32	しぬ(死)	今昔(ホ)
中	31	しく(敷)	今昔2(ホ)(ホ)三教2(ホ)(ホ)
	30	さしのく(去・四)	今昔(ホ)
	29	さしあつ(当)	今昔2(ホ)(ホ)宇治(リ)
	28	くらふ(食)	今昔(ホ)
	27	くだる(下)	今昔3(ホ)(ホ)(ホ)
へ	26	きる(着)	今昔(ホ)
中	25	きたる(来)	今昔2(ホ)(リ)
	24	かためちんず(固鎮)	今昔(ホ)
へ	23	かしこまる(畏)	今昔(ホ)古本(ホ)宇治(ホ)十訓(リ)
中へ	22	かくる(隠)	法華(ホ)今昔5(ホ)(リ)(リ)(リ)宇治(リ)
	21	かく(懸・下二)	今昔(ホ)宇治(ホ)十訓(ホ)
中へ	20	おる(下)	今昔(ホ)
中へ	19	おもふ(思)	今昔7(ホ)(リ)(リ)(リ)(リ)(リ)古本2(リ)(ホ)宇治3(ホ)(ホ)(リ)とほず4(リ)(リ)(リ)

38		(くわんねんじやうじゆ)す(観念成就)	閑居(ホ)
39		(うしろようい)す(後用意)	弁内侍(ホ)
40		(ならひなど)す(習)	とはず(ホ)
41	キへ	(ものがたり)す(物語)	今昔3(リ)(リ)(リ)古本(ホ)宇治(リ)
42		(しやうぞく)す(装束)	宇治(ホ)
43		(しゆ)す(修)	今昔(ホ)
44		(じゆ)す(誦)	今昔(ホ)
45		(どくじゆ)す(読誦)	今昔3(ホ)(ホ)(ホ)
46	へ	そばむ(側・四)	保元(ホ)
47		そばむ(側・下二)	十訓(ホ)
48		そむく(背・四)	宇治(ホ)
49		そらす(反)	宇治(ホ)平家(ホ)
50	へ	たつ(立・下二)	弁内侍(ホ)
51		たてまはす(立廻)	今昔(ホ)
52		つきなむ(着並・四)	今昔3(リ)(ホ)(ホ)古本(ホ)宇治(ホ)
53	へ	つくる(造)	今昔3(ホ)(ホ)(リ)宇治(ギモン)(ホ)
54		となふ(唱)	今昔(リ)讃岐(リ)とはず(ホ)
55		とらふ(捕)	今昔(ホ)
56		とりなほす(取直)	

キ	75	よる(奇)	今昔3(ホ)(ホ)(ホ)
へ	74	よりかかる(奇懸)	十訓(ホ)とはず(ホ)
へ	73	もてなす(持成)	今昔(ホ)宇治(ホ)とはず(リ)
へ	72	まゐる(参)	今昔2(ホ)(ホ)古本(ホ)宇治(ホ)たま(ホ)
キ	71	まつ(待)	今昔(ホ)弁内侍(リ)
	70	ほる(惚)	讃岐(ホ)
へ	69	へだつ(隔)	今昔(ホ)
	68	ふさぐ(塞)	今昔(ホ)十訓(リ)
キ	67	ひらむ(平)	今昔(ホ)
	66	ひざまづく(跪)	今昔2(ホ)(ホ)古本(ホ)宇治(ホ)
	65	ひきまはす(引廻)	宇治(ホ)
	64	はらたつ(腹立・四)	今昔(ホ)
	63	はなつ(放)	法華(ホ)今昔2(リ)(ホ)
へ	62	はたがくる(鉸隠)	今昔(ホ)
キへ	61	のぼる(昇)	今昔3(ホ)(ホ)(ホ)三教(ホ)宇治2(ホ)(リ)
	60	のく(退・四)	今昔(ホ)宇治(ホ)
	59	ねんじいる(念入・四)	今昔(リ)宇治(ホ)
	58	ぬぐ(脱・四)	今昔(ホ)
	57	ならぶ(並・四)	今昔(リ)宇治(ホ)

	76	るぎりのく(居去・四)	今昔(ホ)
	(b)		
キ	1	うむ(統)	今昔(ア)
	2	おきたつ(起立・四)	宇治(ア)
キ	3	おもひなげく(思歎)	今昔(ア)
キへ	4	す(為)	今昔2(リ)(リ)宇治3(ア)(リ)(ホ)
	5	(ていきふ)す(啼泣)	今昔(ア)
キへ	6	みる(見)	今昔(ア)
	7	もつ(持)	古本(ア)
キ	8	やすむ(息)	今昔(ア)とはず(リ)

別表二の注

- [キ]………院政・鎌倉時代の文献に「動詞+キル」の用例が存する  
 [へ]………平安時代の文献に「動詞+テ+キル」の用例が存する  
 (ホ)………後部要素「キル」が本動詞としての意味を保ち、全体として二つの動作を表している例  
 (ア)………後部要素「キル」が本動詞としての意味を失い、全体として進行態・已然態表現になっている例  
 (リ)………右の(ホ)にも(ア)にも解せる、両義的な例  
 <ツツ>………構成要素間に接続助詞「ツツ」が介在する例  
 <ギモン>………テキストの本文に重大な校異が存する例

(1) 岡野幸夫「平安時代和文における「居」に関する一考察」(『山口国文』第十五号・平成四年三月)

(2) 検索文献と使用テキストは以下の通り。用例を掲げる際、各文献名の最初の二・三文字をとって略称とした。なお、校異は、検討に影響を与えるような重大なものについては、できるかぎり掲げた。

〈平安時代文献〉

竹取物語・伊勢物語・大和物語・落窪物語・堤中納言物語・浜松中納言物語・夜の寝覚・狭衣物語・栄花物語……岩波日本古典文学大系

土左日記・紫式部日記……岩波新日本古典文学大系

三宝絵詞(馬淵和夫監修・中央大学国語研究会編『三宝絵詞自立語索引』笠間書院・昭和六〇年) 多武峰少将物語(『多武峰少将物語本文及び総索引』小久保崇明編・笠間書院・昭和四十七年八月) 平中物語(『平中物語』研究と索引) 曾田文雄著・溪水社・昭和六十年十一月) 蜻蛉日記(『改訂新版かげろふ日記総索引』佐伯梅友、伊牟田経久・風間書房・昭和五十六年三月) 宇津保物語(『宇津保物語本文と索引本文編』宇津保物語研究会編・笠間書院・昭和四十八年三月) 枕草子(『新校本枕草子』根来司編著・笠間書院・平成三年四月・注…本テキストは、三卷本文の右に能因本文を対校しているが、用例を掲げる際には、三卷本文のみをとることとし、当該箇所が能因本と一致する用例のみを掲げる) 源氏物語(『源氏物語大成』全八卷・池田亀鑑編著・中央公論社・昭和二十八年六月〜昭和三十一年一月) 和泉式部日記(『和泉式部日記総索引』東節夫、塚原鉄雄、前田欽吾共編・武蔵野書院・昭和三十四年五月) 更級日記(『更級日記総索引』東節夫、塚原鉄雄、前田欽吾共編・武蔵野書院・昭和三十四年五月) とりかへばや物語(『校注とりかへばや物語』鈴木弘道著・笠間書院・昭和五十一年三月) 大鏡(『対校大鏡』根本敬三編・笠間書院・昭和五十九年七月・注…本テキストは、底本文の左右に対校本文を配した体裁であるが、用例を掲げる際には、底本文のみをとることとし、校異は用例文の後に列挙することとする。校異のうち、仮名遣いの相違・漢字と仮名との相違は、これを省略した)

〈院政・鎌倉時代文献〉

算物語・今昔物語集・保元物語・平治物語・平家物語……岩波日本古典文学大系  
中務内侍日記・承久記……岩波新日本古典文学大系

信生法師日記・弁内侍日記・春の深山路……小学館新日本古典文学全集

在明の別れ・無名草子・恋路ゆかしき大将・小夜衣……『鎌倉時代物語集成』第一巻〜第五巻(市古貞次、三角洋一編・笠間

平安・鎌倉時代における「動詞十テ十キル(居)」の意味について

書院・昭和六三年九月〜平成四年四月)

松浦宮物語(秋谷朴『松浦宮物語』角川文庫・昭和五〇年四月再版) 兵部卿物語(『別冊年報』実践女子大学文芸資料研究所・平成六年三月) 我身にたどる姫君(金子武雄『物語文学の研究』笠間書院・昭和四九年四月) 讚岐典侍日記(今小路覺瑞・三谷幸子『校本 讚岐典侍日記』初音書房・昭和四二年二月) 高倉院殿島御幸記(坂詰力治・見野久幸『源通親日記 本文及び語彙索引』笠間書院・平成三年三月) 高倉院升遐記(同上) たまきはる(鈴木一彦・鈴木雅子『たまきはる(健御前の記) 総索引』明治書院・昭和五四年十一月) 海道記(鈴木一彦・猿田知之・中山緑朗『海道記 総索引』明治書院・昭和五一年十一月) 東関紀行(江口正弘・熊本女子大学国語学研究室『東関紀行本文及び総索引』笠間書院・昭和五二年十月) うたたね(次田香澄・酒井憲一『うたたね 本文および索引』笠間書院・昭和五一年二月) 十六夜日記(江口正弘『十六夜日記 校本及び総索引』笠間書院・昭和四七年八月) とはすがたり(辻村敏樹『とはすがたり 総索引』笠間書院・平成四年五月) 法華百座聞書抄(小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院・昭和五〇年) 古本説話集(山内洋一郎編『古本説話集 総索引』風間書房・昭和四四年) 打聞集(東辻保和著『打聞集の研究と総索引』清文堂出版・昭和五六年) 三教指帰注(築島裕・小林芳規編『中山法華経寺本三教指帰注総索引及び研究』武蔵野書院・昭和五五年) 宝物集(月本直子・月本雅幸編『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』(古典籍索引叢書6) 汲古書院・平成五年) 方丈記(鈴木知太郎解説『大福光寺本方丈記』武蔵野書院・昭和三四年) 宇治拾遺物語(桜井光昭編『三本对照宇治拾遺物語』武蔵野書院・平成元年六月) 閑居友(峰岸明・王朝文学研究会編『閑居友本文及び総索引』笠間書院・昭和四九年) 十訓抄(泉基博編『十訓抄本文と索引』笠間書院・昭和五七年)

(3) 筆者の調査によれば、平安時代には七十三例、院政・鎌倉時代には九十七例(いずれも異なり数)が認められた。

〔付記〕 本稿は、国語学会中国四国支部第四十回大会(平成六年十一月十一日・於島根大学法文学部)での口頭発表をもとにまとめたものである。発表について、小林芳規先生、重見一行先生、関一雄先生、柳田征司先生をはじめ、多くの方々より貴重なご教示を賜った。記して深謝申し上げる。